

# 母性看護実習で想定される事故についての学生の認識（第2報）

## －実習後の振り返りより－

Student perception of possible accidents in maternity nursing training 2nd report  
－reflection after the nursing training－

藤邊 祐子・坂本 保子・高橋 雪子

### 要旨

本研究の目的は、母性看護実習で想定される事故について実習中に学生がどのように認識したのかを振り返った自由記述から明らかにすることである。対象は、A 看護系短期大学母性看護実習を履修した学生74名である。自由記述した内容のテキストマイニング分析を行った後、原文に立ち返り詳細に読み込んだ。結果、【新生児の沐浴に関連した事故予防】【妊産褥婦の身体的特徴からの事故予防】【自身の体調管理と感染予防対策】【実習が事故なく終了できたことへの安堵】【自身の事故予防に関する今後の課題】というテーマが抽出された。学生は対象者の特徴や周囲の状況の実際を確認しながら実習していたことがわかり、今後の事故予防教育に活かしていきたいと考える。

キーワード：母性看護実習、事故、学生の認識

### I. 緒言

看護基礎教育における臨地実習は、座学で学んだ理論を実践と結び付けて看護学生が学びを深める場である。しかし、学生の未熟さによりさまざまなインシデント・アクシデントに遭遇する可能性が高い。看護系大学・短大での臨地実習におけるインシデントやヒヤリハットは、「療養上の世話」が83.4%と多く、その内容は「移動・移乗」「誤飲・誤嚥」「清潔」「抑制」「報告」である<sup>7)</sup>。

母性看護学領域では、沐浴に関すること、報告に関すること、新生児に対する場面でのヒヤリハットが多く発生している<sup>11)</sup>との報告がある。また、母性看護実習でのインシデント・アクシデントの発生は、注意不足、知識不足、思い込みのほか、学生が置かれている状況や環境、安全管理・安全教育の問題、関係した人々の影響などのいくつかの要因が介在している<sup>11)</sup>と報告されている。

母性看護実習におけるインシデントをはじめとした医療事故のリスクは高く、ひとたび事故が起きると妊婦や産婦自身のみならず家族の人生や新生児の成長発達等に大きな影響を及ぼす恐れもあると考えられる。よって、学生自身が医療事故の危険性があることを強く認識する必要がある。

平成20年2月厚生労働省は、看護基礎教育の技術項目の卒業時の到達度の項目として、「安全管理の技術」「安全確保の技術」を設けた。また、平成26年度に公表された保健師助産師看護師国家試験出題基準の中の看護師国家試験出題基準には医療安全が明記され、医療安全の内容が問われることとなり看護基礎教育として医療安全教育が重視されている。

そこで、母性看護実習で想定される事故を予防するために看護基礎教育における技術項目の卒業時の到達度を参考にし、自己評価表を作成した。自己評価表は、妊婦・産婦・褥婦・

新生児に分類し作成し、学生は自己評価表に沿って実習前後に評価を行った。さらに、実習後には母性看護実習で想定される事故についての振り返りを自由に記述した。本研究は自己評価表の自由記述から母性看護実習で想定される事故についての学生の認識を明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象

2017 年度 A 看護系短期大学で母性看護実習を履修した看護学生 74 名。

### 2. データ収集期間

2017 年 4 月～2018 年 3 月

### 3. データ収集方法

母性看護実習終了後、実習で想定される事故の自己評価表に学生が自分自身で記載した。

### 4. データ分析方法

対象となった自由記述データをテキストマイニングの手法を用いて分析した。テキストマイニングとは、膨大なテキスト（文書）情報の中から有用な情報を掘り出すことで定型化されていないテキストデータを一定のルールに従って定型化して整理しデータマイニングの手法を用いながら、相関関係などの定量分析を行う手法である。分析ソフトは Text Mining Studio ver6.1（NTT データ数理システム）を用いた。テキストマイニング分析を行った後、質的帰納的分析を行った。原文を繰り返し確認し文脈を理解した。分析の全過程を通して、解釈が先入観に捉われていないか、内容の妥当性を欠いていないかについて研究者間で確認・照合して分析の緻密性の確保に努めながら研究を進めていった。

## III. 倫理的配慮

研究者である教員から、研究協力者である学生に対して以下の内容を口頭で説明した。具体的には、研究の目的や意義、個人が特定されない方法でデータを取り扱い本研究以外に

は使用せずデータの守秘管理に努めること、回答の内容や研究に参加の場合でも不利益のないこと、本研究に参加しなくても母性看護実習の評価には関係ないことである。また、本研究は、八戸学院大学・短期大学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。（No18-24）

## IV. 結果

### 1. テキストマイニング分析の結果

頻度が多く出てきた単語を上位 20 位まで表 1 に示し、係り受け分析の結果、上位 20 位を表 2 に示す。

### 2. 原文から導き出されたテーマ

頻度が多く出てきた単語と係り受け分析の結果から原文に立ち返り、文脈から【新生児の沐浴に関連した事故予防】【妊産婦の身体的特徴からの事故予防】【自身の体調管理と感染予防対策】【実習が事故なく終了できたことへの安堵】【自身の事故予防に関する今後の課題】というテーマ（表 3-1・表 3-2）が導き出された。

## V. 考察

### 1. 導き出されたテーマについての考察

#### 1) 【新生児の沐浴に関連した事故予防】

頻出された単語の「新生児」「沐浴」「取り違い-防ぐ」「コットネーム-確認」に注目し、原文に立ち返り詳細に読んだ結果、「新生児の沐浴後、名前の確認を何度も行い、お母さんにも確認してもらうのは新生児の取り違いを防止するために重要なことだと改めて学んだ」や「沐浴を実施する際に新生児が処置台から転落しないよう見ながら援助したり、新生児をしっかりと抱き、落とさないように沐浴を実施することができた」等の記述が確認され、【新生児の沐浴に関連した事故予防】というテーマが導き出された。

本学では、実習前に新生児のモデル人形を用いた沐浴テストを行っている。沐浴テストを行ったことで学生は新生児のケアや沐浴時

表1：単語頻度解析

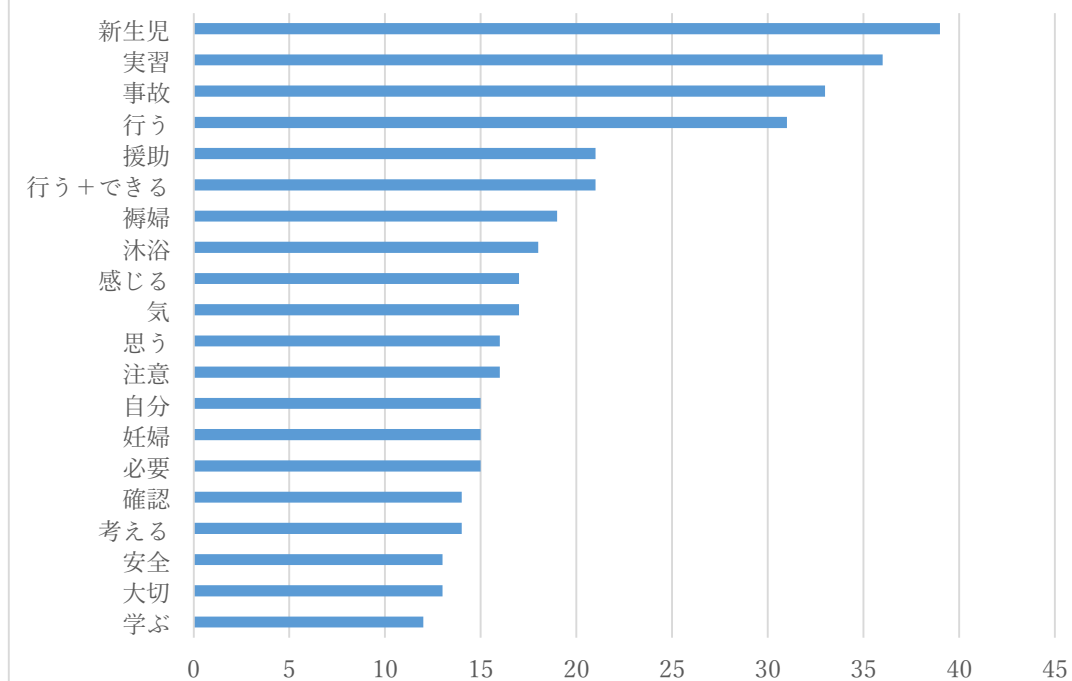


表2：係り受け頻度解析

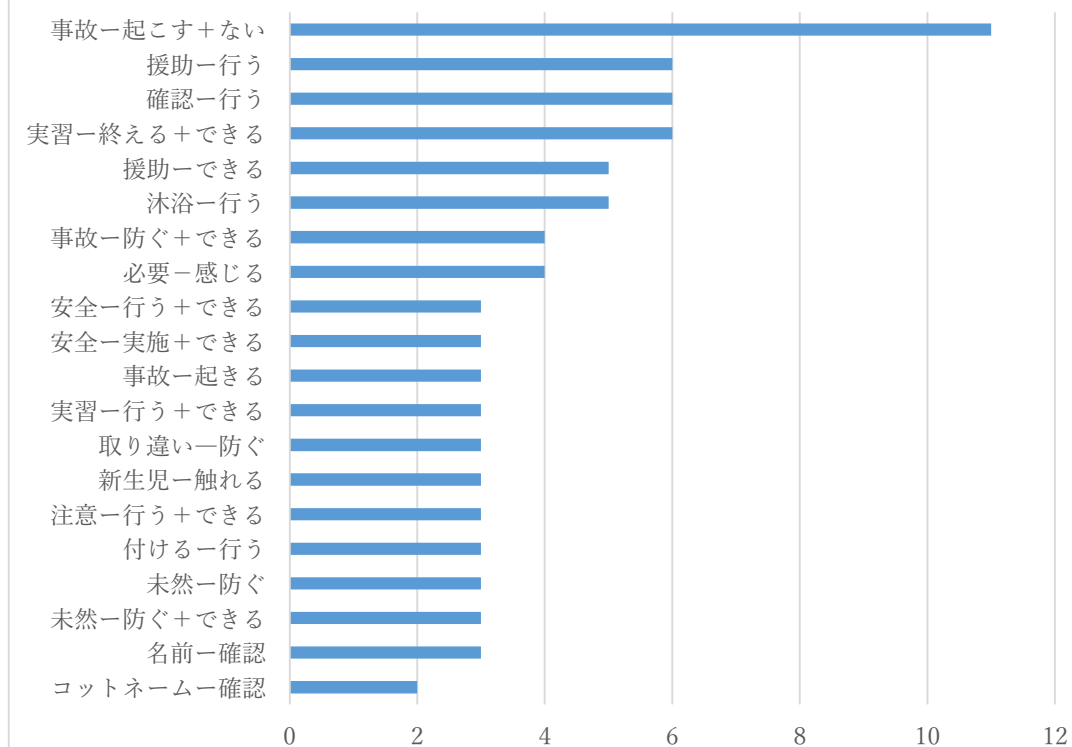


表 3－1

新生児の沐浴に関連した事故予防	新生児の沐浴後、名前の確認を何度も行い、お母さんにも確認してもらうのは新生児の取り違いを防止するために重要なことだと改めて学んだ。沐浴は学内で行う人形とは全くちがいが、体動が激しかったり、啼泣があったりととても難しかった。体重測定も転落の危険をしっかりと頭に入れて行った。
	今回の実習では新生児の取り違いを防ぐために生まれてすぐにネームバンドを取りつける他にベンで新生児の足にも母親の名前をかいていることやナースステーションへ新生児をあずけ迎えにきた際にネームプレートと母親のネームバンドを確認しており徹底していると感じた。
	沐浴を実施する際に新生児が処置台から転落しないよう見ながら援助をしたり、児をしっかりと抱き落とさないように沐浴を実施することができた。
	沐浴時、緊張しながら行って、事故はなかったけれども、沐浴することによっていっぱいになってしまったことがあった。背中を洗う時に児の顔が湯につかないよう教員に指導頂くなど視野が狭くなっていた。回数を重ね、沐浴することにも緊張はするけど慣れることで、視野を広げて行うことがで新生児に関してはとても慎重に触れるように行った。しかし、股を手で支えるのが甘かったり、沐浴の手技に集中しすぎて新生児の頭が沐浴槽に近くなってしまう危険などを起こしてしまった。何かあってからでは遅いので、手技だけでなく、新生児を囲む環境も考慮しながら援助を行っていく必要
	沐浴を行った後に、新生児の取り違いを防止するため、母子標識、コットネームの確認、指先呼称を実施し、事故防止に務めることができた。
妊産褥婦の身体的特徴からの	褥婦と新生児の間違いがなく、沐浴終了後など病室に戻る時は、自分だけで確認するのではなく褥婦と一緒にダブルチェックすることが大切だと学んだ。
	沐浴時に危険がないよう、コットごと動かすことも大切だと学んだ。
	新生児の沐浴の際やコットから移動する際など転落や落下することのないよう慎重に行った。
	沐浴は学内で行う人形とは全くちがいが、体動が激しかったり、啼泣があったりととても難しかった。体重測定も転落の危険をしっかりと頭に入れて行った。
	実習中は妊婦、産婦、褥婦の転倒・転落に気をつけ、ふらつきなどあった場合は支え、防止することができた。
自身の体調管理と感染予防対策	妊婦や褥婦の安全を考慮して、起立時はふらつきがないか見守り、そばにいて支えるなど転倒予防を行うことができた。
	妊産婦、褥婦は今まで病院でみてきた患者と違い、意識もはっきりとしていて、自分のことは自分で行える人達だが、自分達でできるからこそ、見ていない所で、事故等が起こる可能性はあるため、細かい所まで注意、配慮し、援助を行うことができた。
	切迫早産で入院した妊婦には腹部緊満が増強した時は伝えてもらうように説明をしたり、病院内移動時も看護師についてもらい、ふらつき症状などがみられても対処できるように援助を行うことができた。
	内診台には実際に座ってみることで、転倒しないよう安全に配慮した対応法を学ぶことができた。
	車椅子に移乗する時は、車椅子の座席部分が開いているか、ストッパーがかかっているか確認してから移乗することができた。
自身の体調管理と感染予防対策	産婦や褥婦が立ち上がる時はふらつきがないか観察し、ベットの高さやスリッパの位置に気をつけるよう環境整備を行うことができた。妊婦、産婦、褥婦の転倒の危険について、歩き方や様子から理解することができた。
	足浴を実施した際、妊婦が点滴をしていて、シャワー室に入る際、輸液ポンプの電源コードを妊婦がまたいだり、いすに座るまえにふらつきがあった。妊婦はお腹が大きいので下がみえなかったりするため、引っかけた転倒が予測される。シャワー室はすべりやすいので十分に注意して行わなければならないとわかった。
	実習中は感染を予防するために手洗いや手指消毒を細めに行うことを意識した。
	対象に触れる前、触れた後の手洗い、手指消毒を徹底して行うことで感染予防をした。
	実習中、途中で左目が一時的に充血してしましたが、すぐに教員に報告・連絡・相談を行うことができ、感染予防に努めることができたと思える。
自身の体調管理と感染予防対策	新生児や褥婦、妊婦に触れる時は、必ず消毒をしてから触れるようにしたり、感染予防について主に自分がやったことである。
	自分自身が事故の原因、感染源とならないように手洗いや消毒、事故に注意した。
	環境の変化により、食欲不振となることがあった。起立性低血圧のような症状がでてしまうことがあったため、食事は3食しっかりと摂ることが大切であると改めて感じた。
	慣れない環境下であっても体調管理に気をつけることができた。疲れや心身の不調がヒューマンエラーを招くのを理解できていたが、寝不足の日が多く、事故を招きかねない状態であったと考える。
	慣れてくると確認が疎かになり、そこから事故につながるため確認は怠らず、意識的に行うように習慣付ける必要があると考えた。
自身の体調管理と感染予防対策	実習を振り返り、1回も遅刻、早退、欠席することなく実習を終えることができてよかったと思った。
	感染予防の必要性を理解し、マスク、手指消毒を行うことができた。
自身の体調管理と感染予防対策	手洗い、手指消毒を援助の実施前、実施後に必ず行うことで感染予防ができた。

藤邊祐子・坂本保子・高橋雪子：母性看護実習で想定される事故についての学生の認識  
(第2報)－実習後の振り返りより－

表3－2

実 習 が 事 故 な く 終 了 し た こ と へ の 安 堵	実習中は事故がないよう注意しながら行うことができた。
	想定される事故として、これらは実際起きることなく、実習を終えることができた。
	実習を事故なく無事に終了する事が出来たので良かったと思う。
	事故の原因となる対応策を具体的に考えて、実施する事ができた。
	今回の実習は事故を起こさず終了することができた。
	実習時に起きそうな事故を自分で考えて、また対処法を考えて事故を起こさずに実習することができた。
	今回の実習では、事故が起きたりインシデントが起こることなく行えたので良かった。
	実習では安全に行うことができ、事故を起こさずにできたので良かった。
	事故を起こすことなく、実習を終えることができた。
	実習中、事故、インシデント、ヒヤリハットがなく、ケア・援助が行えたため良かったと思う。
	事故を起こさず、あわてないで2週間実習することができた。
	安全に留意して事故を起こさず実習ができた。
	実習中は事故がないように十分配慮して臨むことができた。
自 身 の 事 故 予 防 に 関 す る 今 後 の 課 題	母性看護実習で想定される事故を意識して、事故なく実習を終えることができた。
	事故を未然に防ぐ行動を学び、事故なく実習を終えることができた。
	事故を起こすことなく実習を終えることができた。2週間の実習中に小さな事故も起こすことなく終えることができた。
	ヒューマンエラーとして知識不足、技術不足は予習・復習や理解できるまで繰り返し実施することが大切であると学んだ。
	視野を広げ余裕をもって行動すること、自分の動線を確保することが、事故防止、効率的な作業につながるのだと感じることができたため、そこを今後の課題とする。
	今後の実習でも、インシデントを起こさないよう周りをよく見て行動して事故のない実習にしていきたい。
	今回私は情報共有の点を学ぶことができた。情報が伝達しないことにより、事故が発生するリスクがあるという事学んだため、今後は報告をしっかりとるようにしたい。
	知識としては分かっているが、確認不足や焦りなどにより事故をおこしかねないため、常に落ち着いて援助できるようこれからもしっかり練習や勉強をしていきたい。
	実際に病院で実習をさせていただいて、看護の知識・技術はもちろんだが患者や看護師との接し方など多くのことを学ぶことができた。これからの実習や将来に活かしていきたいと思った。
	私は焦りやすい傾向が強いので、ミスに繋がる可能性がある事を念頭におき、今後注意していきたい。実習も終盤で、慣れやおごりも出てきていると思うので、再度気を引きしめていきたいと思う。
	今後も事故が起きる可能性は充分にある。過信せず事故が起きないよう意識を持ち慣れたとき程事故は起きやすい為注意していく必要がある。
	何かあった時はすぐに先生や看護師に報告・相談していくことが必要だと感じた。さらに、もっと積極的に援助を行っていく必要があると感じた。
	指導者さんからは、明るい表情で積極的にになったらより良い実習が出来るとのアドバイスを頂いたため、今後まだある実習に向け、活かし自分のためになる実習を行っていききたいと思う。
	私は焦ると注意力が低下したり、手がふるえてしまうことがあるので、一度落ちついてから深呼吸して行動することで、緊張による失敗することが減るということを自覚することができた。
	処置や援助に集中しすぎて周囲を見ることができていない時もあったため、今後の実習では注意していく必要があり改善点だと思った。
	視野を広げ余裕をもって行動すること、自分の動線を確保することが、事故防止、効率的な作業につながるのだと感じることができたため、そこを今後の課題とする。

の事故予防を意識し、実習後の振り返りに沐浴時に事故予防行動が取れたという記述につながったと考えられる。新生児は、自ら動くことはないが、ケアする側の不注意によって、落下の危険性がある。新生児に関連した医療事故が起きると、その後の成長発達において障害が起きる可能性もあり、実習中に医療事故

を予防するための準備や指導は大変重要であると考えられる。実習前には新生児の観察の技術演習や沐浴テストの際に、そして、実習では沐浴を行う際には、事故の起こりそうな部位の意識付けを行っていく必要があると考えられた。

2) 【妊産褥婦の身体的特徴からの事故予防】

頻出された単語の「褥婦」「妊婦」に注目し、原文に立ち返り詳細に読んだ結果、「実習中は妊婦、産婦、褥婦の転倒・転落に気をつけ、ふらつきなどがあった場合は支え、防止することができた」や「妊婦はお腹が大きいため、下が見えなかったりするため、輸液ポンプの電源コードに引っかかって転倒が予測される。ケアは注意して行わなければならない」等の記述が確認され、【妊産褥婦の身体的特徴からの事故予防】というテーマが導き出された。

母性看護の対象者である妊婦、産婦、褥婦は、20 歳～40 歳代であり、妊娠、分娩、産褥期においてセルフケアへと導くための看護が必要な対象となる。また、現在の少子高齢化を鑑みても、看護学生は大学に入学するまでに妊婦や新生児に触れる機会はかなり少なく、実習前に妊婦・産婦・褥婦をイメージさせるように関わるが、講義や実習前のオリエンテーションだけでは具体的にイメージすることが難しい。しかし、学生は臨地実習で実際に妊婦、産婦、褥婦と接することによって、妊娠に伴う腹部の増大によってバランスを崩しやすいことや分娩後の貧血や産褥期の疲労からの立ちくらみの可能性など身体的特徴を学ぶことができていた。切迫早産の妊婦では安静の保持により、ベッドから起き上がる際に立ちくらみを生じる可能性にも気づいており、転倒、転落の可能性もあることを記述できていた。このことから、妊産褥婦の身体的特徴からの事故予防に具体的な場面を通じて気づくことができていたと考えられる。

### 3) 【自身の体調管理と感染予防対策】

頻出された単語の「自分」「安全一行う＋できる」「安全一実施＋できる」に注目し、原文に立ち返り詳細に読んだ結果、「実習中は感染を予防するために手洗いや手指消毒を細めに行うことを意識した」や「新生児や褥婦、妊婦に触れるときは、必ず消毒をしてから触れるようにしたり、感染予防について主に自分がやったことである」等の記述が確認され、【自

身の体調管理と感染予防対策】というテーマが導き出された。

感染予防対策では新生児は易感染状態であること、面会を家族に限定していることなどから母性看護実習の対象者は感染しやすいという特徴があると認識できたと考えられる。また、実習中は寝不足や緊張などから自らが感染しやすい状態になるので感染予防に気を付けたいという記述も見られた。手洗い、手指消毒、うがいといった感染予防行動を取り、自身が感染源にならないように体調管理しているという記述も多くみられた。実習中は自身の体調管理のみならず、自身が感染源になる可能性もあることを認識することができ、感染予防行動へとつなげることができていたと考えられる。

### 4) 【実習が事故なく終了できたことへの安堵】

頻出された単語の「実習」「事故」「事故一起こす＋ない」「事故一防ぐ＋できる」に注目し、原文に立ち返り詳細に読んだ結果、「実習を事故なく無事に終了することができたので、よかったと思う」や「実習時に起きそうな事故を自分で考えて、また対処法を考えて事故を起こさずに実習することができた」等の記述が確認され、【実習が事故なく終了できたことへの安堵】というテーマが導き出された。

母性看護援助論にて母性看護の対象は、ひとたび事故が起きた場合には、妊婦や産婦のみならず、家族にまで影響があり、新生児にとっては成長発達に大きな影響を及ぼすことを繰り返し講義している。さらに、実習前には知識の確認テストや看護技術の練習などを行い、想定される事故についての自己評価表を記載し実習へ向けての準備を行っている。そのため、母性看護の対象者に事故を起こしてしまうと重大な出来事になってしまうことを自覚して実習していたと考えられる。実習前に想定される事故について自己評価したことにより、実習中、想定される事故を意識することができ、まずは「自分が看護の対象者に多大な悪

影響を及ぼす事故を起こすことがなかった」という安堵した記述が多く見られたと考えられる。

#### 5) 【自身の事故予防に関する今後の課題】

頻出された単語の「大切」「学ぶ」「安全－行う＋できる」「安全－実施＋できる」に注目し、原文に立ち返り詳細に読んだ結果、「ヒューマンエラーとしての知識不足、技術不足は予習・復習や理解できるまで繰り返し実施することが大切であると学んだ」や「処置や援助に集中しすぎて、周囲を見ることができていない時もあったため、今後の実習では注意していく必要があり改善点だと思った」等の記述が確認され、【自身の事故予防に関する今後の課題】というテーマが導き出された。

母性看護実習後に想定される事故について振り返ったことにより、自身の今後の課題につながっていた。実習が今後も継続していくこと、また、実習が終了したとしても医療現場で実際に看護師として働く際には、事故を予防していくことが必要である。実習が終了したところで改めて、自身の事故に対する課題を見つけられている学生もいた。実習前に自己評価表を提示し、事故が想定される場面をイメージしてから実習に臨んだことにより、事故に対する意識が高まっていたと考えられる。自身の今後の課題を記載していたことにより、看護師として働いていく自分という次の段階に活かそうとする姿勢が見受けられたと考える。

#### 2. 臨地実習の振り返りの効果

振り返りとは、「リフレクション」と表される。「リフレクション」とは日本語において「内省」「省察」「反映」「熟考」という意味を持つ。河井は、リフレクション・プロセスに焦点化した Gibbs らのモデルは、リフレクションは経験から始まり、記述（何が起きたのか）、感情／反応（どう反応したのか、どういう感情だったのか）、評価（その経験は良かったのか悪かったのか）、分析（その状況をどう理解するの

か）、結論（導き出される一般的結論およびパーソナルな結論は何か）、アクション・プラン（次に同じような経験に直面したらどうするのか）という流れのステップが表現されている<sup>4)</sup>と述べている。

本研究においても、実習での経験の記述【新生児の沐浴に関連した事故予防】【妊産褥婦の身体的特徴からの事故予防】【自身の体調管理と感染予防対策】と感情の記述【実習が事故なく終了できたことの安堵】があった。そして、評価、分析、アクション・プランとなる【自身の事故予防に関する今後の課題】となっていた。今後、振り返った内容を学生の深い学びとして支援するためには、リフレクション支援が必要である。具体的には、自身の経験を記述し他学生に伝えることを相互に行い、情報共有及び意見交換をすることで学びを共有することができる。今後は振り返りが学びの拡大につながるよう関わっていきたいと考える。

#### 3. 今後の課題

柘野は、「1～2年次には、基礎看護技術を学ぶ中で、医療安全や事故防止を特別なこととして考えるのではなく、看護者として当たり前のこととして医療安全や事故防止の考え方の基礎を修得できるような工夫がなされることが重要である」<sup>9)</sup>と述べている。さらに、「専門的な学習を積み重ねていく過程で、学生の医療安全に関する感度を上げていくことができるような教育方法の工夫が必要である」<sup>9)</sup>と述べつつ、「医療安全・事故防止に関する教育は、演習を含め学内での学習には限界があると思われる。実習において学内で修得した知識と実際を結びつけること、丁寧に看護実践の振り返りが行えるように関わるのが今後の課題である」<sup>9)</sup>と述べている。本学の母性看護実習は4ヶ所の施設で実習を行っており、3名の教員が指導を行っている。異なる施設や複数の教員体制の中でも一貫した指導ができるよう、今後は実習中における事故予防のための指導案を作成したいと考える。

## VI. 結語

母性看護実習で想定される事故について実習中に学生がどのように認識したのか、自己評価表に自由に記述した振り返りを質的記述的に分析した。結果、【新生児の沐浴に関連した事故予防】【妊産褥婦の身体的特徴からの事故予防】【自身の体調管理と感染予防対策】【実習が事故なく終了できたことへの安堵】【自身の事故予防に関する今後の課題】という 5 つのテーマが抽出された。母性看護実習前に想定される事故の評価表を用いたことにより、事故に対しての意識が高まり、対象者の特徴や周囲の状況を確認しながら実習していたことがわかった。今後、学生自身の経験を記述し他学生に伝えることを相互に行い、情報共有及び意見交換をする場を設ける等の事故予防教育を行っていききたい。

## 謝辞

本研究に協力してくださいました学生の皆様に深く感謝いたします。

本研究の一部は、第 60 回日本母性衛生学会学術集会において Web 発表した。

## 引用参考文献

- 1) 石川雅彦、斉藤奈緒美：看護学生の臨地実習に関わるインシデント・アクシデント事例の検討—再発・未然防止と指導者に求められること—公益社団法人 地域医療振興協会 地域医療安全推進センター 看護教育 2014 55-3 222-227
- 2) 岩本真紀、名越民江、南妙子他：看護系大学における医療安全教育に関する調査研究 香川大学看護学雑誌 2008 第 12 巻第 1 号 47-55
- 3) 上西洋子、中川美代子、竹島道子：臨地実習における看護学生のインシデントに関する要因の検討 大阪市立大学看護短期大学紀要 2003 第 2 号 57-62

- 4) 榎本晶、緒方紀子、水戸美津子：看護におけるリフレクションとメタ認知の考察 聖徳大学研究紀要 聖徳大学 2017 第 28 号 聖徳大学短期大学部 2017 第 50 号 151-156
- 5) 河井亨：リフレクションのプロセス・モデルの検討—Schon の省察的実践論と Engestrom の探求的学習モデルの縫合— 京都大学高等教育研究 2017 23 59-68
- 6) 近藤絵美：看護実践における看護専門職へのリフレクション支援の効果に関する評価方法—文献レビュー— 千葉看会 2020 VOL. 26 No. 1 1-8
- 7) 野口寿美子、伊藤一美：看護学教育におけるコンピテンシー獲得に向けた教育方略検討の試み—メタ認知とリフレクションからの考察— 医療福祉情報行動科学研究 2019 VOL. 6 39-48
- 8) 柘野浩子：看護学生が事故の危険を感じた場面と事故予防にとって大切だと認識した力 新見公立大学紀要 2015 67-73
- 9) 柘野浩子：看護学生の医療安全教育への課題—基礎看護学実習Ⅱでのヒヤリハット発生状況から— 新見公立大学紀要 2014 53-56
- 10) 廣渡加奈子、中村恵美：小児看護学実習前の学生が認識する病棟における危険因子—学生のレディネスを踏まえた医療安全教育の基礎的資料— 産業医科大学雑誌 2016 38(3) 251-259
- 11) 堀律子、橋本宣子：看護学生の事故に関するリスクマネジメントグループディスカッションによるインシデントの要因および対策の検討 日本看護学会論文集 看護管理 2011 41 110-113
- 12) 松本明美、登喜玲子、日下知子ら：母性看護学実習におけるインシデント・アクシデントの実態と教育上の課題 川崎医療短期大学紀要 2006 26 37-44
- 13) 助産師・看護師の技術項目の卒業時の到達度 (厚生労働省 2008)



藤邊祐子・坂本保子・高橋雪子：母性看護実習で想定される事故についての学生の認識  
(第2報)－実習後の振り返りより－

<https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000475666.pdf>

14) 独立行政法人 地域医療機能推進機構 医療安全管理指針 - JCHO

<https://www.jcho.go.jp/wp-content/uploads/2016/06/20160614anzenshishin.pdf>

15) 平成 26 年度保健師助産師看護師国家試験出題基準 (厚生労働省 2014)

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002y1by.html>

16) 文部科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラム・大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会」2017

**執筆者紹介 (所属)**

藤邊 祐子	八戸学院大学健康医療学部看護学科	講師
坂本 保子	八戸学院大学健康医療学部看護学科	准教授
高橋 雪子	八戸学院大学健康医療学部看護学科	教授